「満洲」開拓青年義勇隊派遣の論理とその混成中隊における農業訓練の破綻

The Logic behind Detachment of Japanese Youth Pioneering Brigades to Manchuria and the Collapse of the Farming Training due to its Hybrid Squadrons

今井 良一*

Ryoichi IMAI

The objective of this article is to show how easily and quickly the 3-year-long farming training for Japanese youth pioneering brigades in Manchuria failed and how foolhardly the project was.

The training institutions were essential for smoothly establishing large-scale agriculture. In those days, Japanese peasants in Japan never desired large-scale agricultural management.

Japanese youth pioneering brigades entered the agricultural training institutions in Manchuria. The groups were organized by people from various prefectures (the hybrid squadrons). The hybrid squadrons were sent to Manchuria yearly from 1938 to 1940.

This was one way to deal with the agricultural failures of experimental groups of adult emigrant groups, who went to Manchuria from 1932 to 1935. The colonization was carried out to make the colonists carry part of the burden of controlling Manchuria and defending against the Soviet Union, and to establish a self-supporting buffer state.

In order to establish agricultural management as demanded by agricultural policy, it was essential to establish a system of cooperation. Especially in case of emigration of youth pioneering brigades, the cooperation of the peasants and their families was essential. But, in the hybrid squadrons, the following items 1-4 failed: (1) establishment of strong leadership, (2) formation of a group consciousness that could work in agriculture, (3) learning agricultural skills in Manchuria, and (4) establishing a lifestyle suitable for the Manchurian climate.

At last, the training failed, and the agricultural settlements didn't come into existence. On the contrary, in the emigration of youth pioneering brigades in the hybrid squadrons, because they were underage and immature in body and mind, the establishment of the above-mentioned items (1) through (4) was much more difficult than for the adult immigrant groups. As a result, their ability in agriculture already declined before their movement to settlements, and it was far inferior to the adult emigrants who formed settlements as soon as they settled in Manchuria.

1. はじめに

(1) 本稿の課題は、「満洲」(現中国東北地区。以下括弧略) 支配や対ソ防衛、帝国圏内における食糧自給体制確立の一端を担わせるため、20 カ年 100 万戸移住計画 (1936 年～)。以下、大量移民政策と記す) 期において、38 年以降、毎年送り出されることになる未成年男子による移民である満洲開拓青年義勇隊 (渡満前には満蒙開拓青少年義勇軍、渡満後に満洲開拓青年義勇隊と名称を変更。本稿では満洲での彼らの活動を分析するため後者の語を用い、以下、義勇隊と略す) のうち、複数府県出身者で編成された混

成中隊 (38～40 年。第 1～3 次) を取り上げ、義勇隊開拓団への移行後、スムーズに農業経営を確立するための前提として決定的に重要だった現地訓練所での農業訓練がいとも簡単に破綻し、いかに計画そのものが無謀なものだったのかを明らかにすることである。

満洲開拓とは、一方では内地過剰人口の処理策＝内地農村の不満の捌け口として構想されたが、他方ではアジア農業のモデルたるべき近代的大経営の創出策＝日本のリーダーシップの証明の場としても位置づけられた。にもかかわらず、ごく一部を除いて経営的にはたちゆかず、早期に地主化してしまったことはこれまでに指摘されている。但し、その事実が確認されているだけで、経営が破綻し地主化しなかった理由が明らかにされていないわ

* 神戸親和女子大学

けではない。本稿は、経営的にたちゆかなかった原因を、満洲農業が必要とする技術的諸条件を整えられなかったばかりか、入植者（隊員）に対する訓練も実態を欠いたものであり、政府の位置づけを実現させる条件を根本的に欠いていたことを明らかにしたものである。

(2) 義勇隊の農業移民としての評価は、満洲農業移民政策を考える上で不可欠である。なぜなら前述のように、農業移民とは内地では決して望めない大規模農業経営を満洲で確立して「農業者として定着」することが主な目的であり、なかでも義勇隊は、その前史として1932～35年に送出され、結局は農業経営を確立できなかった試験移民（成年移民）の対処策のひとつ⁽¹⁾として非常に期待されたものであるからである。さらに「一九四三年以降の満洲移民事業の全面的崩壊をかりうじてくいとめ」（浅田、1976、106頁）ていたとも評される農業移民の主軸だったにもかかわらず、従来の研究では、義勇隊の農業移民としての検討が行なわれないうまま、その農業経営・農業生産力が、試験移民だけでなく、その後の大量移民政策期における成年移民のそれらよりも悪化したと低く評価するものがある一方で、それらが飛躍的に発展したと高く評価するものがあるからである。

しかし本稿で明らかにするように、少なくとも混成中隊に関しては、開拓団移行後における農業経営確立の前提として非常に重要だった農業訓練について決して高く評価できるものではない。そこで以下、研究史を整理し、混成中隊の農業訓練を検討する意義を明らかにしておこう。

従来の研究において、義勇隊の農業訓練の評価にかかわるものは次の相反する指摘に絞られるといっていよう。白取道博は、義勇隊開拓団は成年移民の「一般の開拓団に比して営農能力を低く見積もらなければならなかったから（中略）農業移民としては形骸でしかなかった」（白取、2008、208頁）とその評価は低く、そればかりか試験移民を含む大量移民政策期の成年移民よりも営農能力が低下していたことを指摘した。一方、上笠一郎は、「（隊員は）三年間の現地訓練所で、満洲式の農業技術（満洲在来農法）についてひととおり学んだはずであったが、それは、実地にはほとんど役立たなかった」（上、1973、139～140頁。但し括弧内は筆者加筆）としつつも、(3)で述べる試験移民での諸問題を打破し、移民の農業者としての定着を促すために導入が試み

られた北海道農法への「大転換をおこなってからは、各地の義勇軍開拓団の営農成績は、目に見えて上がってゆきはじめた」（同、141～142頁）と一転してその農業経営を高く評価した⁽²⁾。上の説では、義勇隊開拓団での農業経営のみならず、その前に行なわれたはずの北海道農法の訓練を高く評価することになる。筆者は上の説は間違いだと考える。なぜなら上自身も認めているように、（混成中隊において）訓練組織がその体をなさないなかで、北海道農法の訓練はもちろん農業に関わる訓練が成功したとは考えられないし、また農業移民の本来の目的は持続的な農業の確立であるのに、その成否を「一時的な」収量の増加（または減少）だけで判断すべきではないからである。筆者は基本的には白取説の立場だが、いずれの説にも共通する問題は、義勇隊の農業に関する詳細な分析がないことであり、何よりも義勇隊開拓団への移行後の農業経営に決定的な影響を与えたはずの現地訓練所での農業訓練の実態がほとんど明らかにされていないことである。したがって、まず農業訓練についてできるだけ広い視野から検討することが求められているといえよう。

その際、留意すべきこととして次の2点があげられる。①義勇隊は試験移民の農業上の諸問題の対処策としての性格をもっていたことである。したがって試験移民での諸問題を踏まえつつ、義勇隊について考察する必要がある。しかし、従来の研究では、かかる視点に着目して分析したものはない。ただ本稿の検討範囲は現地訓練期であって、義勇隊開拓団での農業経営の分析を含めておらず、対処策としての最終的な評価を確定することについては別稿に譲らねばならないが、かかる視点を意識しつつ分析することは義勇隊における問題について、より深い理解を可能にしてくれるだろう。②混成中隊と郷土中隊とを区別することである。混成中隊では、本稿で明らかにするような数多くの問題が発生し、その対処策として、同一府県出身者によって編成された郷土中隊（1940～45年・第3～8次）⁽³⁾の送出が始まった。したがって、混成中隊と郷土中隊とは性格が異なるため区別して検討する必要があるといえる。こうした区別の必要性は、郷土中隊の編成と前後して、国策に順応した「良質な」義勇隊員の確保を目的とした拓務訓練や義勇隊訓練本部の設置など諸制度の改編が行なわれたことから理解できる。したがって、それぞれに即した分析が必要であり、まず混成中隊が取り上げられねばならない。

その他に義勇隊に関する研究は多数⁽⁴⁾あるが、義

勇隊の試験移民の対処策としての性格に着目しつつ、農業訓練に関して検討したものはほとんどないし、白取も述べているように、いずれも混成中隊と郷土中隊との区別への着目が希薄である⁽⁵⁾。

以上の研究史を踏まえ、本稿では、義勇隊のうち混成中隊を取り上げ、義勇隊開拓団移行後にスムーズに農業経営を確立するための前提として非常に重要だった現地訓練所での農業訓練の実態を明らかにし、いかに計画が無謀なものだったかを示す。その際、後述のように、農業上、協業体制の確立に特に重要となる共同意識、農業技術の習得、幹部・指導員のリーダーシップ、生活のあり方に着目して分析する⁽⁶⁾。また北海道農法に関しては、近年、満洲農業移民の評価を定める上で重要な論争点であり、混成中隊での北海道農法の訓練の実態を明らかにすることはその議論を補うことにもなる⁽⁷⁾。本稿によって、混成中隊の義勇隊開拓団や郷土中隊の検討が今後、可能となるだろう。

(3) 義勇隊は基本的には16～19歳の未成年男子による移民で、50人で1小隊、6小隊で1中隊を編成し、成年移民のように渡満とともに開拓団を建設するのではなく、現地訓練所で3年間の農業訓練の後に義勇隊開拓団へと移行する特殊な形態をとった。

かかる訓練は主に試験移民での反省により実施されたといえる。農業移民は四大営農方針⁽⁸⁾（自作農主義・農牧混同主義・共同経営主義・自給自足主義）や満洲開拓政策基本要綱に基づき、農業者としての定着が要請された。その方法とは、1戸当水田1町歩と畑9町歩の平均計10町歩をもとに、家族労働力を主とし、農家間で協力しながら経営と生活の安定のために水田・畑・家畜を取り混ぜて多角的に経営し、自給自足的な生活を営む、というものだった。しかし試験移民では農業経営は容易に破綻して地主化（農業から離脱）してしまう。寒冷地のため農業の適期が極めて制限された満洲において、彼らが採用した満洲在来農法では多くの労働力が必要だった。そのため「農業をやるには四、五戸が協同でやる方が都合がよい。一戸当り十町歩の耕地を分譲され（中略）畜産もあれば、水田、畑作、蔬菜園の仕事もあつて（中略）手が廻らず（中略）播種や植付の適期を失ひます。どうしても（中略）協同することが必要」（拓務省拓務局、1938、11頁）だったが、筆者がこれまでに明らかにしてきたように、試験移民では、政策が要請したような農業経営確立のために不可欠となる協業体制（＝家族内協業＋農家間協業）が成立しなかつ

たため、多量の雇用労働力を導入せざるをえず、多額の雇用労賃が経営を破綻させたのである⁽⁹⁾。

義勇隊でも、農業集団として成立させねば、試験移民と同様の問題を抱えることになり、開拓団への移行後、農業経営の確立が困難で、容易に地主化することは明らかだった。このため特に以下のことが期待され、義勇隊に対して3年間の訓練が課せられたのである。すなわち未成年は身体的にも「思想的にも柔軟性に富」（陳野、1988、119頁）み、妻帯までに期間があるため徹底した訓練によって入植前に技術を習得するとともに、満洲の気候風土や衣食住に順応でき、さらには屯墾病（ホームシックのこと）にかかりにくいから動揺も少なく、「団体生活を通じ訓練と実習を通じて（中略）（開拓団への移行後も）そのまま協働」（拓務省拓務局、1938、11頁。但し括弧内は筆者加筆）可能で、「最初の年から失敗なしに農耕をやり」（同、28頁）、理想的な農村が建設できる、と考えられた⁽¹⁰⁾。義勇隊、つまり未成年に対する訓練は、後に示すような実務訓練中に4～5人による組単位共同経営を確実に成立させ、開拓団への移行とともにスムーズに農業経営を確立するためには好都合かつ不可欠なものとされたのである。

しかし、かかる政策的期待にもかかわらず、混成中隊で、これらが実現するような訓練が行なわれなかったことは前述のとおりである。

義勇隊に関する史料は宣伝的な性格が強く、一部分が強調されて高い評価になっている場合がある。そのため様々な角度から内容を精査しつつ、記述方法としては、各現象の全般的傾向を確認した上で、渡満年次などについてできるだけ偏りのないように配慮して様々な中隊や訓練所での具体的事例をあげ、その内容がより詳しく明らかになるように努めた。また、2次史料から補う際、不整合がある場合には除外した。

2. 混成中隊の編成

(1) 混成中隊の特徴

混成中隊における隊員の年齢、学歴、出身家庭の戸主との続柄、出身家庭の職業の特徴について、白取（2008）から、以下の3点が確認できる。①1938年は年齢にばらつきがあるが、その後、急速に16歳以下の者が増え、年齢の低下と均一化が進んで心身ともに一層未熟な者が増加したことである。②いずれの年も高等小学校卒業を最終学歴とする者が非常

に多い。ただ年齢との関連でいえば、38・39年は高等小学校卒業後すぐに渡満したというよりは、一旦「家業を含め何らかの職業に従事している者」（白取、2008、130頁）が多かった。③出身家庭の職業は農業が最多（約7～8割）で、続柄は次・三男を中心とした家督相続者ではない子弟が約7割を占め、土地への憧れを持つ者が多かったと考えられる。一方、農業以外の職業家庭出身者が2～3割を占めることは訓練のあり方を左右したと考えられ、注意を要する。

また混成中隊は2つの府県出身者で編成されたものもあれば、30以上もの府県出身者で編成されたものまで様々だった⁽¹¹⁾。

(2) 当該期における訓練制度

まず隊員には内原訓練所で精神的鍛錬に重きを置いた約2カ月間の訓練が課せられた⁽¹²⁾。

渡満後、隊員は、最初の1年間は嫩江・勃利・鉄驪・孫呉・寧安・対店などいずれかの大訓練所で「満洲の気候、風土や衣食住に親しませ（中略）開拓農業の基礎訓練」（三浦、1942、7～8頁）を、次の2年間は基本的には1中隊で小訓練所に移転し、「理想農村の建設を目標とした営農計画の樹立並に其の実施」（同、20頁）に必要な実務訓練を行なうことになっていた。その後、第1次、2次、3次義勇隊はそれぞれ1941年、42年、43年の10月に義勇隊開拓団へと移行した。

なかでも小訓練所は甲種、乙種、丙種、鉄道自警村の4種に分類され、甲種は実務訓練終了後にその地区に開拓団として定着、乙種は他所に移動して開拓団を新たに建設、丙種は隊員の特質によって農業以外の訓練をする訓練所で、哈爾濱の嚮導訓練所（指導員・医師・教員養成）、吉林鉦工実務訓練所（重要鉦工部門の技術員養成）、満鉄実務訓練所（満鉄の技術員養成）があり、他とは性格を異にした。また鉄道自警村訓練所は鉄道沿線の資源開発と鉄道防衛を目的とし、訓練終了後は甲種と同様、その地区に定着するものだった⁽¹³⁾。

3. 混成中隊の組織的破綻とその理由

(1) 隊員の共同意識のあり方

農業上、共同作業に重要となる隊員の共同意識のあり方を確認すべく、①隊員の農業に対する意欲、②中隊内での幹部・指導員と隊員との関係、③中隊

内での隊員間の関係、についてみておく。

①当時、各地の訓練所で「ふらふらしてゐる（中略）相当数居」（拓務省、1941、34頁）り、「茫々タル雑草畑（中略）仮病ノ休養（中略）多クアリ（中略）数町歩以上ノ美畑ヲ有シツツ敢ヘテ天災有ルニ非ズ（中略）日々ノ野菜ニ事欠」（野村、1978、464～465頁）いていたとか、「他に転向したいけれども（中略）心ならずも踏止つてゐるといふ者が少くな」（石山、2000、46頁）く、明らかに隊員は農業への意欲を喪失していた。杉浦中隊（1次・山形和歌山混成・嫩江訓練所→柏根訓練所→柏根義勇隊開拓団の順に移行。以下、訓練所を略し、また義勇隊開拓団を義開に略して記す。さらに同名の中隊の場合はアルファベットを付して区別する。既出については特に必要のない限り括弧内を略す）では「作業に出る人員がだんだん少なくなり（中略）只宿舎にごろごろ」（佐倉、1944、166頁）し、酒井中隊a（1次・北海道群馬石川他混成・寧安→尚家→尚家義開）でも「農業をやるのは嫌だ（中略）毎日々々ぶらぶらして」（拓務省、1941、32頁）いた。山本中隊（2次・府県不明・鉄驪→慶山→慶山義開）では「仮病である事は一目瞭然」（全国鉄驪会編、1993、317頁）で、黒沢中隊（2次・府県不明・昌図→寧安→四台子→大民義開）では「（脱走して）来る者が沢山あります（中略）百姓を嫌」（拓務省、1941、33頁。但し括弧内は筆者加筆）がってのことだったという。

②幹部・指導員と隊員との関係は非常に悪く、「所長排斥の声がふえたりするのが通常」（鈴木、1942、6頁）で、「多勢ノ生徒ハ訓練所長ヲ袋叩キトシ脅迫暴行」（依田、1972、42頁）したり、逆の場合もあり、史料上、かかる記述を見つけるのには事欠かない。

③混成中隊は年齢にばらつきがあって、リーダー的人物を得やすいという利点があったものの、「訓練生同志（ママ）の相克」（江坂、1943、7頁）が多発した。酒井中隊b（1次・長野熊本青森兵庫他混成・寧安→青山→大東義開）では「小銃を構え合」（第一次大東義勇隊開拓団史刊行会編、1981、65頁）い、辻中隊（2次・広島島根混成・哈爾濱→対店→葉家→広根義開）では「生命を危ぶむに至らしめ」（葉家訓練所辻中隊、1942、13～14頁）、坂下中隊（3次・31県混成・昌図→大石頭→南台子義開）でも「中隊内の暴力沙汰」（川北、1981、253頁）が起こっていた。

1941年に満洲国最高検察庁がまとめた「満洲国開拓地犯罪概要」には、移民の犯罪が記録され、特に「青少年義勇隊ノ犯罪ハ増加ノ傾向ニ在リ（中略）騒擾、殺人、傷害、暴行等甚ダ粗暴ナルモノノ多」（野

村、1978、463頁) かったとされる。かかる事態は内部だけでなく、訓練所に苦力として雇用されたものや訓練所の周囲に追いやられた現地住民へも当然波及した。これらは氷山の一角にすぎないだろうが、義勇隊と成年移民の犯罪を比較しても、義勇隊の方が極めて悪質だったことを示している。

(2) 渡満前における共同意識の欠如

隊員の共同意識は渡満前から欠如していたといつてよい。それは以下の理由による。

①渡満前にすでに隊員間で農業への意欲には両極端ともいうべき大きな差があった。

当時、「満州はすばらしい景色、冬でもオンドルやペチカで暖かく室内ではシャツ一枚でも良い。野菜は肥料なしでいっぱいといれ(中略)十町歩近くの土地がもらえる」(斉藤、2007、57～58頁)などと宣伝され、多くの青少年は「東洋平和の為に身を犠牲にしても、この大使命を完成しよう」(拓務省拓務局、1939、10頁)と国策に共鳴し、特に農家の2・3男は「土地を一人がもらつて百姓をするのだと(中略)夢を躍らせ」(葉家訓練所中隊、1942、19頁)た。こうした思いに加え、内原と現地での訓練を経れば「青年学校卒業と同等」(満洲移住協会、1941b、52頁)とされたから、内地では上級学校に進学が困難だった貧しい農家の出身者は、義勇隊への参加を国策遂行という荣誉と自らの立身とを両立できるものにとらえた。それに青少年期は未経験や世間の狭さから影響されやすく、一方で、自立しようとしている時期⁽¹⁴⁾でもあるために、彼らの満洲開拓への思いは増幅されることになり、親の反対を押し切って参加する者が続出したのである。その後、内原での訓練と加藤完治の影響、皇族・大臣等の視察、村をあげての壮行会や兵隊の出征と同様の見送り、さらには宮城遥拝・伊勢神宮参拝を経ることで、多くの隊員の士気はいやが上にも揚がることになった。

一方、「片手に鋏、片手に銃を持つそのイメージは、軍人になりたいという(中略)夢を満たすに十分であった」(上、1973、6頁)し、「青年義勇軍ト云フノハ実ニ子供ノ感興ヲ惹」(白取、1984、210頁)く言葉だったから、それらに釣られて入る者も少なからず存在した。また次の事情からも農業に無関心な者が多く入ることになった。それは日中戦争の長期化や親の反対もあって、隊員の確保が不安定だったために、勧誘・送出担当者が、義勇隊では訓練終了後、一部(約1割)は農業移民としての定着以外も制度上認められていたことを送出定員を満たすための手

段として最大限に利用したことによる。彼らは「集めさへすればよいと云ふ風」(拓務省、1941、32～33頁)で、「官吏にもなれる。満鉄にも行ける、好きな職業につける」(櫻田、1942、14頁)などといい、その結果、「軍人その他を志望するが為、訓練の要なしとする」(満洲移住協会宣伝部、1938、49頁)者、「考へもなくあつざりと行つた」(満洲移住協会、1943a、30頁)者、「一旗挙げやうとふらふら入つて来る」(満洲移住協会、1942a、40頁)者がいた。なかには「(在郷軍人) 会長さんから義勇軍に行かないなら国賊だといわれ軍刀抜いて脅され」(斉藤、2007、49頁。但し括弧内は筆者が加筆) たという場合すらあったのである。

②「県民性と云ふものが一番恐ろしい(中略)大部分(中略)うまく行つてゐない」(拓務省、1941、31頁)といわれたように、隊員間に地縁的な結びつきのなかったことが、最初から共同での農作業を不可能にしていた。村崎中隊(1次・岩手石川兵庫大阪他混成・嫩江→哈川→臨安義開)では「他県の人達と一緒にゐると言ふ先入観念を悉く抜き捨てる事が出来ず」(菅野、1939、102頁)、油田中隊(1次・埼玉静岡茨城富山他混成・寧安→大石頭→大和義開)では「郷土意識が強すぎるためか(中略)毎夜のように暴力沙汰」(川北、1981、211頁)にまで至っていた。わずか2県の出身者からなる杉浦中隊(山形和歌山混成)でさえ、「言葉も習慣も気性も違ふ(中略)気分がしっくりしない(中略)最初からお互を警戒し、融和し得な」(佐倉、1944、129頁) かったのである。

(3) 現地訓練期における意欲の低下と組織的破綻

「大陸に上陸するまでは(中略)希望に燃えて来るが、大陸の土を踏み(中略)働く場所に入るとそれが消え」(満洲移住協会、1941a、27頁)る者が続出した。ここではその理由を、①「治安」⁽¹⁵⁾、②農作業、③収穫、④農外作業、⑤倦怠感の伝染、⑥未成年性(未成年的傾向)、⑦幹部・指導員のリーダーシップ、のなかに見出したい。生活については第5章で詳述する。

①隊員は「始終近地区に匪賊⁽¹⁶⁾の情報を受け(中略)銃の不足から(中略)鋏の柄丈けを手にして警戒し」(上野、1941、86頁)たり、「匪賊の奴が、どこかで見てゐるかも知れ」(打木、1944、32頁)ず、「一台のトラックにも警備員が五、六名も附」(拓務省拓務局、1939、11頁)いた。また訓練所に出入りする「苦力(中略)に細密な注意をはら」(同、39頁)

わねばならなかった。さらには実際に戦闘にも加わり、時には仲間の死に直面したのである。しかしこうした事態は隊員自らが引き込んだものでもあった。前述のように、訓練所への入所自体が、多くの場合、現地住民を立ち退かせて、彼らの多くを苦力として雇用した上に、隊員自身が苦力のみならず、訓練所の周囲に追いやった住民に対しても様々な犯罪行為を重ねていたからである。

②隊員は訓練上、共同作業を求められ、報酬（小遣い）が平等かつ少額あるいは皆無だったために不満が高まっていた。農業は自然に大きく依拠する産業であるため、共同作業では個人の努力や能力などが評価されにくく不公平感を生みやすい。それは前述のように、最低でも2～3割の農業未経験者がいればなおさらだった。そのため堀口中隊（1次・北海道茨城富山他混成・哈寧安→平陽→平陽義開）でのように、1人当1カ月約2円の「小遣は一定の同額を与へて行けば必ず「働いても働かなくても同じでは働かない方が利益だ」と云ふ」（平陽訓練所堀口中隊、1942、55頁）意識を抱かせることになったのである。

③前述のように、多くの訓練所、中隊ではあまりに農業生産が困難だったために、隊員は将来に不安を感じていた。西神中隊（2次・8県混成・嫩江→泥秋→共栄義開）では「収穫野菜では（中略）眼に見えて不足」（上野、1941、85頁）し、辻中隊でも「粗飼料が漸く一ヶ年分得られたといふのみ」（葉家訓練所辻中隊、1942、17頁）だったのである。

④隊員は数多くの厳しい農外作業（警備、運搬・建築作業）を強いられた。多くの訓練所は駅から離れた所にあった（最短0.5km、最長160km、平均31.3km⁽¹⁷⁾。鉄道自警村を除く）のに加え、雨季には「泥濘悪路に化して車軸を没し（中略）河水の増水は完全に舟行を杜絶」（江坂、1943、11頁）して、徒歩での「運搬は、言語に絶する苦しみ」（櫻田、1942、16頁）であり、建築作業でも「土ピーズ、一夜にして、数十万を失ひたるは、一再に止まらず（中略）惨状の連続」（江坂、1943、11頁）だった。また零下30度の酷寒期でのそれら作業も過酷だったのである。

⑤そうしたなか、「党を組んで一般善良生を圧迫するが如きものも（中略）跡を絶たな」（赤羽、1941、172頁）かった。津村中隊（1次・秋田群馬静岡他混成・勃利→虎山→虎山義開）では「他人までも誘つてサボらせ」（拓務省、1941、24頁）、杉浦中隊でも「一部のものが（中略）荒んだ所行をする様になると、それが忽ち（中略）伝染」（佐倉、1944、136頁）し

たのである。

⑥成年と未成年とを明確に区別することは困難な場合が多いことはいうまでもないが、構成員が未成年だったことを強調せざるをえない。それは特に次の3点である。（ア）一般的に、未成年は成年に比べて体格・体力が劣る。当時の報告書をもても、隊員1人当の労働力は0.6人で換算されていることからわかる⁽¹⁸⁾。そのため様々な作業は、「十四歳の私にはかなりの重労働」（出口、1993、18頁）だとか「（荷物を）小さな訓練生の肩に載せ背に負ふて（中略）湿地帯を腰まで浸り」（鈴木、1942、4頁。但し括弧内は筆者加筆）、とあるように、低年齢の者であるほど重くのしかかったのである。（イ）隊員は「兵役の義務を済ませねばならぬから、その間に考へが變つて終ふ惧れ」（満洲拓植公社、1938、18頁）があるといわれたが、それ以前に「もうじき軍隊だわと思うと親身になってやる気持ちもない」（満蒙開拓を語りつぐ会編、2006、197頁）という意識を多くの者がもつことになった。なかには「義勇隊に別を告げ（中略）去る方法として志願する者」（石山、2000、46頁）があったという。（ウ）桂（1977）を参考にすれば、未成年は成年に比べて一般に精神的に次のような特徴をもつことがわかる。第1に、情緒不安定に陥りやすいことである。混成中隊はいったん社会に出た者を多く含んでいたとはいえ、かかる時期に想像とはかけ離れた辛い体験をしたのだから、彼らの不安や不満は並外れたものになった。第2に、彼らのそれらへの対処のあり方は未熟で忍耐力も低く、何事にも無関心となったり、バランスのとれない行動をとりやすいことである。そのため動揺が激しく、脱走や退所が相次ぐとともに、なかには自殺者まで現れ、一方で、中隊内部での確執や隊員の支配者意識と相まって現地住民への様々な犯罪行為にまで容易に拡大したのである。第3に、不安や動揺を隠すために似た者同士で集まって他を排除し、大人からの助言を拒否する傾向が強いことである。下記⑦のように、幹部・指導員がかかると一連の事態に対処する能力をもっていなかったために、隊員は反発を強め攻撃的になったのである。

したがって、義勇隊の場合、後述の生活面も含め、様々な現象が「露骨に現れ（中略）直線的で飾り気も遠慮もな」（佐倉、1944、137頁）く、義勇隊開拓団への移行前にすでに成年移民よりも一層深刻だったことがうかがえる。

⑦そして幹部・指導員は、前節（2）①②および本節上記①～⑥の事態に対処できるリーダーシップを

もたなかった。「幹部が人を得ないといふ評判は何処でも相当」(図司、1941、60頁)で問題であり続けた。酒井中隊aでは「本当に努めてゐる幹部先生がゐない(中略)外によい会社の勤口でもあればその方へ行かう、さう云ふ方面が多」(拓務省、1941、26頁)く、車田中隊(2次・宮城鳥取山口他混成・勃利→綏芬河→梧桐義開)でも「真剣になつてやつてくれない」(同)などと、隊員に酷評されたのである。

しかしかかる事態の責任を幹部・指導員にのみ押し付けることはできない。なぜなら「一班十人の生徒を相手に丁寧な実習指導を行なうのさえも容易でない」(陳野、1988、55頁)とされたにもかかわらず、制度上は1中隊300人を中隊長、教学、農事、教練、庶務など5～7名の幹部・指導員だけで担当することになっていただばかりか、実際には幹部・指導員が「二、三名しか居ない」(矢口、1942、59頁)中隊があったり、隊員がとまどうほど出入りが激しかったのである。

4. 混成中隊における農業技術指導体制の不備

(1) 隊員による農業技術の習得状況

開拓団移行前後における隊員による農業技術の習得状況を、①全般的傾向、②満洲在来農法(事例)、③北海道農法(事例)、に分けて確認しておこう。

①当時、満洲移住協会弘報部長だった山名義鶴は、義勇隊では「農業の実務訓練が始つて出来てゐない」(満洲移住協会、1941c、18頁)とし、本間喜三治も「訓練所は実践農学校を予測したが、事実にはるかに及ばなかった」(本間、1942、15頁)と述べ、隊員は農業技術の習得が不完全なまま義勇隊開拓団へと移行せざるをえなかったことがうかがえる。

②義勇隊を含む満洲農業移民が農業を営む上で基本かつ重要な農法であり続けた満洲在来農法の隊員による習得状況は次のようになる。杉浦中隊(1次)では「自由に使へこなせ」(佐倉、1944、84頁)ず、工藤中隊(1次・新潟富山岐阜東京他混成・寧安→柳樹河→沙河橋義開)でも「完全なる一農年の農耕訓練を受けた事が無いと云ふのは(中略)営農の自信を得せしめ」(藤生、1941a、92～93頁)なかった。こうした中隊はまだ良い方で、津村中隊(1次)では「農耕の体験は当然出来なかつた」(拓務省、1941、23頁)という。第2次の辻中隊、小林中隊(2次・8県混成・昌図→鉄驪→尾山→八栄義開)も同様に、それぞれ「農

業が如何なるものかと言ふ事さへ理解出来なかつた」(葉家訓練所辻中隊、1942、12頁)、「農業的技術を如何程修得して居るかと言へばこれも疑問」(尾山訓練所小林中隊、1942、45頁)で、黒沢中隊(2次)のように「吾々自身で研究して行かねばならぬ」(拓務省、1941、22頁)とあるのは興味深い。さらに第3次の坂下中隊でも「一朝一夕には出来るものではない」(上柿、1942、73頁)という状況だった。

③開拓総局は1941年1月に「開拓民営農指導要領」を示し、移民に北海道農法の導入を本格的に開始した。しかし渡辺中隊(1次・長野岡山山口高知他混成・哈爾濱→嫩江→聚和→聚和義開)、佐伯中隊(1次・長野山形混成・鉄驪→北斗→北斗義開)ではそれぞれ「馬が調教してないので仲々出来ぬ」(藤生、1942b、57頁)とか、「プラウ農法(北海道農法)をやつて行くために(中略)日本馬の使い方を十分に修得して行く積り」(拓務省、1941、22頁。但し括弧内は筆者記す)、というものであり、第2次の小林中隊でも「馬も、プラウも一年生から初めねばならぬ」(尾山訓練所小林中隊、1942、41頁)ず、辻中隊では北海道農法の重要な一部である「酪農経営の何たるかを知る筈はありません」(葉家訓練所辻中隊、1942、21頁)という程度だった。

では、かかる事態に陥ったのはなぜだったのだろうか。

(2) 現地訓練期における農業技術習得の阻害要因

①前述のように、隊員は農業への意欲を喪失して、農作業を忌避するとともに、「講義などには殆んど大部分が欠席」(佐倉、1944、166頁)していたのである。

②3千～1万人収容の大訓練所では中隊間のトラブルが絶えなかった。羽賀中隊(2次・全国混成・勃利→大茄子→龍湖義開)では「中隊間の摩擦・トラブルは(中略)渡満した当時からあり(中略)西瓜を割られたり(中略)日本刀を抜いて押しかけ」(小林、1988、101頁)られ、桧山中隊(3次・愛知茨城混成・一面坡→大石頭→桧山義開)でも「先輩(中隊)・後輩(中隊)の紛争が起こ」(川北、1981、70頁。但し括弧内は筆者加筆)っていた。また中隊内でも確執が絶えなかったことは前述のとおりである。

しかし隊員に意欲があれば農業技術を習得できたかというところではなかった。

③農具が元々不足した上に不良品が多かった。ほとんどの訓練所では「鍛工班の設備が無いので、故障破損はそのまま倉庫の片隅に放りつばなし」(藤

生、1941b、88 頁) だった。津村中隊では「鎌や鋤頭ばかり配給され」(拓務省、1941、24 頁) た上、「一度使へば刃がこぼれて鋸の刃のやうになつてしま」(同) った。さらに哈爾濱嚮導訓練所では「農具が配給にならぬとか、鋤頭が壊はれ(中略) スコップで種を蒔いたり、畝を作」(同、24～25 頁) るといった非常に非効率な方法を強いられたのである。

北海道農具⁽¹⁹⁾ も、酒井中隊 a では「十分にプラウ等が入ら」(拓務省、1941、21 頁) ず、辻中隊でも「一台のプラウもありません(中略) 方形ハロー、除草ハロー、畦立機を自製でやつて」(葉家訓練所辻中隊、1942、21 頁) というほどで、設備もないなかで精密に北海道農具を作れるはずがなかった。

役畜も元々不足した上に、「畜産の智識が皆余りない(中略) 手当なんかはすっかり間違つてやつて」(拓務省、1941、22～23 頁) おり、損耗が激しく不足に拍車がかかっていた。

④全般に「最も不足を来たしてゐる指導員は、畜産、農事(中略) 保健の指導員にして(中略) 直ちに現地に於ては従事する事は不可能」(矢口、1942、59 頁) だった。そのため「三ヶ年間(中略) 農法を指導してくれる人がゐなかつた(中略) 食糧を生産することが出来ない」(満洲移住協会、1942b、43 頁) 中隊もあり、車田中隊では「農学(中略) をやりたくても教へてくれる先生が居」(拓務省、1941、26 頁) なかつた。

それだけでなく、「指導員はつまらないことしか教へてくれ」(図司、1941、55～56 頁) ず、「大抵の訓練所では(中略) 農家経済、農業経営といふやうな、将来農民として最も重要な事柄について、教へられるところは余りに少」(同、61 頁) なかつた。津村中隊では「満洲農業と云ふものを真に体験したと云ふ指導員がゐな」(拓務省、1941、24 頁) かつた。これは義勇隊では、「小学校の先生を指導者として採用した」(満洲移住協会、1941c、18～19 頁) 上に、「極めて短期間(1 年未満)の訓練を以て指導員に採用」(矢口、1942、59 頁。但し括弧内は筆者記す) したからだった。

⑤「軍事訓練は、実によくや」(図司、1941、54 頁) り、運搬や建築などの農外作業が非常に多かった。特に運搬・建築作業は多数の雇用労働力(苦力) によって行なわれたことに留意する必要があるものの、「三年間と云ふものは建設(中略) に迫はれ」(拓務省、1941、23 頁) た津村中隊のような所もあったのである。

軍にも頻繁に使役された。その最たるものがいずれも農繁期と重なったノモンハン事件(1939 年) と

関東軍特別大演習(41 年) で、「応援作業⁽²⁰⁾ に従事させられ(中略) 物資の輸送に狩り出され、訓練所がからになった」(長野県歴史教育者協議会編、2000、45 頁) という。ノモンハン事件当時、秦野中隊(1 次・徳島愛媛大分山口他混成・勃利→追分→豊稜義開) では「七月十一日(中略) 鉄道沿線の警備(中略) 防空監視(中略) 約二十九日の間昼夜続」(石川県学務部職業課編、1940、11 頁) いた。一方、関特演において、油田中隊では「各駅に派遣され(中略) 一ヶ月」(川北、1981、201 頁) 続き、松山中隊からは「五〇人が動員」(同、85 頁) された。このように頻繁に様々な作業に動員されたのは、隊員が親もとから離れ、かつ訓練中は配偶者をもたず、労働力として利用しやすかつたからにはほかならない。

⑥各所で示したように、特に第 1、2 次義勇隊は 1～2 度訓練所を移動し、さらに開拓団地区へと移転するのが常で、隊員は移転作業に迫られた。なかには南満洲から北満洲へ移動する中隊さえあった。その際、気候や地勢、土壌などが大きく異なる地域へ移転する場合も数多くあり、一層農業訓練を困難にする要因となったと推測される。ただかかる弊害を除くため、基本的には最初に入所した訓練所で 3 年間訓練を受けるように変更され、第 3 次以降になると移転回数は減少する。

⑦すでに述べたように、彼らは徴兵年齢に達すると入営せねばならぬかもしれず、それどころか義勇隊をやめるために入営を早める者がいた。そのため酒井中隊 b では「適齢者が七十名余のうえ、志願者は既に三、四十名となり全員合格すれば(中略) 半数」(第一次大東義勇隊開拓団史刊行会編、1981、110 頁) となり、佐藤中隊(1 次・長野広島宮崎福岡他混成・寧安→東寧第一→大隈義開) でも「人員は余り居りません」(拓務省、1941、20 頁) といわれた。

⑧これまでみてきたことからわかるように、多くの中隊では、「主食はほか、仰いで(中略) 野菜だけはどうしても自給して行くといふ方針」(田村、1942、129～130 頁) をとらざるを得なかつたことが、穀物・飼料栽培技術の習得を妨げていたと考えられる。

その他に、営農を度外視して「各中隊を密集形体に集合せしめ」(中村、1942、15 頁) た訓練所が存在したこと、「本棚の前に行くと『日本修養訓』が真先にあり、それからイソツプ物語で読むべき本がな」(拓務省、1941、34 頁) く、満洲農業の知識を獲得できない中隊が存在したこと、「除草期に入つても苦力が入つて来ない」(同、30 頁) とあるように、雇

用労働力に依存し、隊員が農作業から離脱しつつあった中隊が存在したこと、などがあげられる。

かかる事態に対して、隊員の労働の責任をできるだけ明確化し、やる気を起こさせるため、また義勇隊開拓団への移行後の農作業を考慮して、隊員の出身県や「各自が協力して行きたい」(葉家訓練所辻中隊、1942、16頁)ことに配慮し、10～20人や4～5人の組や班を編成して、それらを単位とした農作業を始める必要があった。しかしこうした処置がとられたのは、津村中隊では「入植を目前に控え」(拓務省、1941、23頁)た時期、さらに久道中隊(1次・群馬新潟福島他混成・孫呉→老虎→老虎溝義開)では「開拓地で(中略)四人の組経営でやる」(満洲移住協会、1942b、39頁)というものもあり、いかに時期を逸していたかがわかる。それに何より、「十人二十人も居るとサボる奴はサボルし(中略)結局馬鹿々々し」(同)くなったといわれるし、4～5人単位の組を編成したところで、協業体制を確立できる条件が整っていなかったことは本稿で明らかだろう。

5. 農業訓練に対する生活上の問題

(1) 現地での生活と共同意識

農業訓練に関連する隊員の意欲の低下や喪失をもたらし生活面の理由として次の7点があげられる。

①隊員の衣服は「継だらけ(中略)又内地から送って貰った着物」(井上、1993a、37頁)で、配給されても「寸法の合った、丈夫なもの」(教学局編、1993、436頁)ではなく、しばしば東傷におかされた。また「碌に洗濯も出来ず」(菅野、1939、19頁)、「縫い目いっぱい虱」(出口、1993、9頁)がつくなど、非常に不衛生だった。

②渡満前には、「満人⁽²¹⁾と同じやうな粟や高粱を食べるやうな心配をされる人がありますが飛んでもない(中略)常食は白米で(中略)野菜も(中略)川魚は豊富であり又豚肉も時に食膳に上り(中略)内地の普通農家よりも贅沢」(拓務省拓務局、1938、25頁)と宣伝された。しかし実際には宣伝内容とは大きく異なっていた。村崎中隊では「粟飯を食はされやうとは誰も思つて居なかつたらう(中略)半分程食つて」(菅野、1939、12頁)やめ、それが「何時迄も続いた(中略)皆不平」(同、14頁)をこぼしたといい、それどころか食事内容はさらに悪化した。その主な理由として次があげられる。(ア)通信上の問題である。秦野中隊では「連絡が取れない(中

略)一食も口にせずにご過ごしたことが幾日か」(拓務省、1941、29頁)あった。(イ)輸送上の問題である。「各訓練所には今、日産自動車が入つて居り(中略)故障が起り易く、部分品も手に入り難」(同、28頁)い上に、前述のように雨季には交通が途絶した。そのため酒井中隊aでは「塩汁で約二週間過し」(同、30頁)たという。それに「北満に行けば行く程どうしても汽車の便と云ふものが悪い」(同、29頁)のために、鉄道自警村である赤坂中隊(1次・栃木埼玉大分熊本他混成・鉄麗→河湾子→秋梨溝義開)でも「粟飯も喰べ沢庵で副食を済した日もあつた」(拓務省拓務局、1939、17頁)のである。(ウ)貯蔵上の問題である。「三百人の約半年に渉る食糧を凍らさず腐らさずに持ちこたへて行くことは難事の中の難事」(佐倉、1944、144頁)だった。村崎中隊では野菜不足のため「遂に野生草の食用を断行」(菅野、1939、20頁)し、横山中隊(3次・香川滋賀和歌山他混成・嫩江→大蒙義開)のように、第3次になっても「野生のアカザタンボポを朝の味噌汁に入れ(中略)ユリの花を食べた」(横山、1977、109頁)のである。(エ)調理の問題である。未成年の「男ばかりの生活では(中略)調理法なども拙劣」(図司、1941、58頁)だった。(オ)治安の問題もあげられよう。

③「誰もが現地へ行けば、立派な煉瓦作りの宿舎に入舎するもの、様に思ひ込んでゐた」(上野、1941、83頁)がそうではなかった。なぜなら「材木を組み合わせた上に泥壁を塗つた丈け」(同)のため、風雨で容易に壊れたからである。これは「初めての事ですから凡てに段取りが進まず随分まごつ」(葉家訓練所辻中隊、1942、22頁)いたことにもよる。その結果、「疲れて帰つて来ても矢張家屋と云ふものが余り良くないとどうも和らいだ気分にならないし、疲れも亦なほりません。じつくりと気が解けな」(拓務省、1941、21頁)かったのである。

したがって、成長期にあるとともに激しい労働を強いられた隊員にとって、このような衣食住の内容は元々満洲の気候風土に適さないばかりか、あまりにお粗末なものだったのである。

④隊員と幹部、隊員同士の親和にはもちろん、隊員の精神衛生上、娯楽が重要だった。しかし哈爾濱の中央訓練所や嚮導訓練所のような特定の訓練所では娯楽設備は比較的整っていたが、「一般訓練所は(中略)娯楽施設が整つて居」(拓務省、1941、26頁)なかった。車田中隊では「剣道、柔道のやうなものを習ひたくも指導者が居」(同)らず、酒井中隊aでも「蓄音機も、ラヂオの設備も全然ありません」(同)、と

いう具合だった。また図書館の「本は実に乏しく」（安東、1942、206 頁）、本があったとしても、池田中隊（1 次・山形徳島鹿児島他混成・鉄驪→小姑家→双葉義開）では「固苦しい本ばかりでは疲れた身体には読む気にはなれ」（拓務省、1941、33～34 頁）なかったという。

⑤故郷からの手紙や慰問は少なく、ある幹部は「家の方からとか、内地の指導者の如き方々から（中略）手紙なり激励なりをして戴くと（中略）暴れん坊の猛者でも（中略）とても和か」（拓務省、1941、32 頁）になると述べるほどだった。しかし手紙や慰問品が送られて来ても、慰問団が来ても、混成中隊ならではの問題が発生した。たとえば「山口県の人々が郷土の人々を慰問、激励するなど、それ以外のものから見れば苦々しい限り」（大上、1942、81 頁）だったからである。

⑥前述のように、中隊間や中隊内での確執が絶えなかったことは、隊員の意欲の低下や無関心を引き起こし、組織の動揺を促すことになった。

⑦「指導者達に、満洲生活の経験者（中略）を見付け出す事は出来なかった（中略）皆言わば素人」（田中、2004、53 頁）であり、上記①～⑥や次節の問題に対処できる力量を幹部・指導員がもたなかったのである。

（2）病気の蔓延と農作業への影響

このような生活環境では、隊員の体力も意欲も一層低下して様々な病気にかかるとともに、なかには死に至る者も出て、彼らをさらに不安に陥れ、実質的に農業訓練を阻むことになった。中井中隊（1 次・長崎岐阜三重他混成・寧安→大石頭→八千穂ヶ丘義開）では「作業人員僅かに三十名」（拓務省、1941、31 頁）にまで減少し、辻中隊では「二百名近い患者が枕を並べて病床に伏し（中略）死亡者だけでも八名を数」（葉家訓練所辻中隊、1941、6～7 頁）えたという。

彼らが夏季に必ず罹ったのが生水の飲用を原因とする赤痢で、「重症になると（中略）一ヶ月も二ヶ月も起てな」（佐倉、1944、103 頁）かった。他にマラリアや「食物の中毒によるものも相当」（井上、1993a、18 頁）あった。冬季には凍傷や流感はもちろん結核が猛威を奮い、渡満後、「マントー氏反応の陽性率が非常に高まって（中略）殆ど全部陽性」（井上、1993b、18 頁）となったという。その他に皮膚病、トラコーマ、「脚気や鳥目の者が数多く」（井上、

表 甲種・乙種訓練所における 1 中隊当平均医療・生活関係担当者数
(1939 年)

医師	医師助手	薬剤師	栄養	看護	寮母
0.32 人	0.02 人	—	0.07 人	0.63 人	0.46 人

1：1939 年当時、41 の中隊が甲種・乙種訓練所へ移行していた。

2：藤澤（1940、185～188 頁）より作成。

1993a、18 頁）あった。これらのうち伝染性のものは蔓延することになった。なぜなら「団体生活をしてゐる関係上、他に伝染し易」（井上、1993b、23 頁）だったからである。

他方、屯墾病も農業訓練を妨げた。「目に触れるもの、心に感じるもの、将来の事等を考へれば（中略）望郷の念の堪へ難」（江坂、1943、10 頁）く、「飯も食べる気もなく友達と話をする気もしなく」（信濃教育会、1942、89 頁）なり、なかには「果てしない真冬の雪原を（中略）見当もつけずに訓練所から脱走」（堀尾、1942、78 頁）したり、線路の「枕木に（中略）寝とったことが何回もある（中略）ああいふ気分てのは伝染する（中略）ひどいになると（中略）命とかどうでもいい」（満蒙開拓を語りつぐ会編、2006、194 頁）状態となった。

このような事態に対して、医療も幹部・指導員も無力だった。医者すらいな中隊が非常に多かった。「医者が赴任して来て二日程居つて、一寸出て来るからと云つて出たきり」（藤生、1942a、50 頁）ということさえあった。また看護指導員は「注射さへ出来れば一本立ちになつたやうに考へ」（井上、1993a、33 頁）、「衛生補導員として内原二ヶ月の訓練期間中にやつと覚えた位な者では余り当てにもなら」（拓務省、1941、29 頁）なかった。さらに「寮母は（中略）非常に少数」（信濃教育会、1942、100 頁）だった（表）。

その結果、「去年入所した中隊と（中略）今年新たに入所した訓練生の間では、古い方が新しい方に較べて体力が少々劣」（井上、1993a、27 頁）り、また「先に倒れた者は治つて働いたが、作業能率は今迄の半分しか上らなかつた。一度治つた者も又倒れ」（菅野、1939、38 頁）るという悪循環をうみ、義勇隊開拓団への移行以前にすでに隊員は心身ともに疲れ果てた状態で、元々身体的にも精神的にも未熟だった隊員の営農能力は成年移民よりもさらに劣るものとならざるをえなかったのである。

6. おわりに

以上、義勇隊のうち、混成中隊を取り上げ、従来の研究では取り上げられてこなかった義勇隊開拓団

移行後にスムーズに農業経営を確立するための前提として非常に重要だった現地訓練所での農業訓練が容易に破綻し、いかに計画が無謀なものだったのかということ进行を明らかにした。また近年論争点となっている北海道農法についても農業者としての定着に結びつく訓練が行なわれたわけではなく、上の説は間違いであることを明らかにできた。つまり満洲農業移民政策は優等経営を実現することでその正当性を主張し、特に義勇隊は最も期待されていたものだが、その条件である北海道農法の普及も隊員への技術訓練もほとんど成果をあげられず、いわば政策の前提自体が崩れていたことを実証的に明らかにした。これにより混成中隊の農業訓練の評価を確定できた。以下、具体的にまとめておこう。

義勇隊では、試験移民の農業経営上の諸問題を克服し、開拓団への移行後、スムーズに農業者としての定着を果たすために、実務訓練中に4～5人による組単位共同経営を確実に成立させることが政策上求められた。そのためには幹部・指導員の強力なリーダーシップの下に、共同意識の形成、農業技術の習得、現地の気候風土に適した生活の確立が必要だったが、混成中隊ではこれらはいずれも破綻したのである。

隊員間の共同意識が形成されなかったのは、以下の理由による。①渡満前からすでに中隊が不安定要因を内在していたからである。それはまず、(ア)構成員が未成年(男子)だったために国策に共鳴しやすい傾向があり、なかでも農家の2・3男が多かったために土地への憧れが強く、当初は農業に意欲のある者が多かったが、一方で、勧誘・送出担当者によって農業に無関心な者もかき集められたために、彼らの農業への意欲のあり方には両極端な差違があったことであり、加えて、(イ)複数府県出身者で編成されていたため地縁的な結びつきを欠いていたことである。②現地訓練所での実際の訓練や生活と隊員が元々抱いていた理想とのギャップがあまりに大きく、多くが意欲を失い、同時に組織も一層不安定になったからである。具体的には、(ア)治安が悪かったこと、(イ)報酬が平等もしくは皆無だった上に、共同作業が求められ不満が高まったこと、(ウ)収穫が得られず不安に陥ったこと、(エ)農外作業が辛かったこと、(オ)衣食住が満たされていなかったこと、(カ)娯楽が不十分だったこと、(キ)慰問が少なく、あったとしても手紙や慰問のある者となない者との間で気まずい雰囲気となったこと、(ク)倦怠感が伝染・蔓延したこと、(ケ)中隊間や中隊内での確執が絶えなかったこと、(コ)一度社会に出た者が多かつ

たとはいえ、身体的にも精神的にも発達途上にある未成年で構成されていたために、上記①(ア)(イ)や②(ア)～(ケ)、下記(サ)の状況に過度に疲弊し、そのため入営を逃げ場所と認識する者や脱走者が続出し、さらには自殺者が出て、動揺が広がったこと、(サ)幹部・指導員が上記①(ア)(イ)や②(ア)～(コ)の諸問題に対処できるリーダーシップを発揮しなかったこと、があげられる。

また農業技術の習得を阻害した理由として次の諸点があげられる。(A)(ア)前述のように、多くの隊員が農業への関心を喪失して農作業や講義を忌避したこと、(イ)中隊間や中隊内での確執に明け暮れていたこと、である。しかし隊員に意欲があれば、農法を習得できた訳ではなかった。それは、(B)(ウ)役畜・農具の不足、(エ)農事・畜産指導員が隊員に農法を指導する力量をもたなかったこと、(オ)親もともからも離れ、かつ配偶者をもたなかったために労働力として利用され、農外作業とともに、軍には農繁期にも使役されたこと、(カ)開拓団への移行までに1～2度の移転が必要だったこと、(キ)入営があったこと、(ク)長距離輸送の困難な蔬菜栽培を優先し、穀物・飼料栽培が困難な場合が多かったこと、(ケ)訓練所によっては耕地の配置が農業に適したものになっていなかったこと、(コ)満洲農業の知識を得られるような本がない中隊が存在したこと、(サ)雇用労働力への依存を強め、隊員が農業労働から離脱しつつあったこと、などによる。そして(C)生活も大きな影響を与えた。つまり満洲の気候風土に適さない生活による体力の低下や上記のような意欲の喪失は、隊員の心身を確実に蝕み、屯墾病も含め、様々な病気を引き起こし、それらが実質的に農作業への従事を妨げた。そのような中、伝染性の病気は団体生活のために瞬く間に蔓延した。かかる事態に幹部・指導員はもちろん医療も無力であり、隊員の病気は悪化するとともに再発を繰り返し、なかには死に至る者まで出たのである。こうした現象は未成年で構成された義勇隊では成年移民よりも一層深刻になったと考えられる。

このようにみえてくると、混成中隊は農業集団として体をなすことはなく、かつ隊員の営農力量は元々成年に比べてみても低いにもかかわらず、一層低下していたことがわかる。そのため義勇隊開拓団への移行後、「三年間の現地訓練を受けた青少年が(中略)成人開拓団のそれにも生産が及ばない…或はそれと同等以上に出でない(中略)食糧の自給も出来」(後藤、1942、41頁)ないといわれたことは無理もない

ように思われる。

今後の課題として、混成中隊の開拓団における農業経営や郷土中隊の検討をしなければならない。それによってそれらが最終的に試験移民の対処策となりえたのかを含めて、農業移民としての評価を明確に示し、満洲農業移民政策の評価を確定できるだろう。

注

- (1) 大量移民政策期には試験移民の反省に基づいて様々な形態の移民が送出された。たとえば分村移民もそのひとつだった。今井 (2008) などを参照。
- (2) 義勇隊における北海道農法の普及実態について、従来の研究では明らかにされていないことに注意を要する。そのため白取 (2008) や陳野 (1988) の指摘では不十分で、上 (1973) を乗り越えているとは言えない。したがって具体的に北海道農法の普及実態が示される必要がある。
- (3) 郷土中隊の送出が中心となるのは 1941 年からだが、40 年には義勇隊の半数を占めた。
- (4) 森本 (1973)、櫻本 (1987)、長野県歴史教育者協議会編、2000)、L・Young (2001)、田中寛 (2004)、小林英夫・張志強編 (2006)、西田勝・孫継武・鄭敏編 (2007)、長野県歴史教育者協議会事務局編 (2007) など。
- (5) 白取 (2008、30 頁)。
- (6) 西村甲一は、協業経営の確立には、①構成員による共同意識 (農業に対する意欲、組織的安定性の確保等)、②構成員による農業技術の熟練、③生活の充実、④中心人物のリーダーシップ (労務管理・経営計画・新技術の濃密な指導等)、が必要としている西村 (1969)。また満洲農業移民の団長経験者だった上野満も、政策が要請したような満洲農業移民の農業経営確立のためには協業体制の確立が不可欠としている上野 (1981、1985)。
- (7) 田中・今井 (2006) を参照。
- (8) 正式には「北満に於ける集団農業移民の経営標準案」という。
- (9) 詳しくは、今井 (2001、2003、2008) を参照。
- (10) 「義勇軍は相当教育の仕方によつて良くもなり、又悪くもなる (中略) (成年) 開拓民は捨て石と考へれば、義勇軍は (中略) 理想的によいものを作つてゆくのではないか」(満洲移住協会、1943b、72 頁。但し括弧内は筆者加筆) というほど期待された。
- (11) 満洲開拓史復刊委員会 (1980、325～337 頁)。同一府県出身者で編成された中隊もわずかが存在した。しかし後年の郷土中隊とは性格が異なるため、そういうものとしてこれを取り扱うことはできない。
- (12) 内原では「百姓の訓練なんて (中略) せんに。ただ兵隊の訓練に似たような (中略) ものは力入れてやった」(満蒙開拓を語りつく会編、2006、189 頁) といわれる。
- (13) 各訓練所数や諸制度の変遷の詳細については、白取 (2008、102～107 頁) を参照。
- (14) 桂広介編 (1977)。
- (15) 日本人からみたものであるため括弧を付した。以下括弧略。

- (16) 「匪賊」とは反満抗日部隊を指す。本来、括弧を付すべきだが引用文中のため括弧を略す。以下括弧略。
- (17) 野村 (1943、21～22 頁)。
- (18) 野村 (1943)。満洲での農業労働者には「打頭め・跟後の・大半拉子・半拉子・更官・大食夫・馬官・猪官等がある (中略) 大半拉子は (中略) 農耕の助手で (中略) 半拉子は大半拉子と等しい職務を割割てられるが、未成年者又は体質不完全な者」(信濃教育会、1938、48 頁) が担当したから、隊員の営農能力は半拉子以下に相当することになる。
- (19) 北海道農具の全般的な不足状況については、田中・今井 (2006、127 頁) を参照。
- (20) 関特演時の状況については、満洲開拓史復刊委員会 (1980、323～324 頁) を参照。
- (21) 「満人」は本来括弧を付すべきだが、引用文中であるため括弧を略す。

引用文献

- 赤羽源夫、1941、現地情況、信濃教育、662
- 安東収一、1942、拓土の生活、大日本出版株式会社
- 浅田喬二、1976、満洲農業移民政策の立案過程、満洲移民史研究会編、日本帝国主義下の満洲移民、龍溪書舎
- 尾山訓練所小林中隊、1942、我が村の建設、開拓、6-8
- 陳野守正、1988、先生、忘れないで！「満蒙開拓青少年義勇軍」の子どもたち、教科書に書かれなかった戦争 Part6、梨の木舎
- 第一次大東義勇隊開拓団史刊行会編、1981、思い出の青山・大東－第一次大東義勇隊開拓団史、関西図書出版
- 出口恒夫編、1993、第一次大岡義勇隊開拓団史 曠野に立つ野火、大岡同志会
- 江坂弥太郎、1943、義勇軍使命の再認識、開拓、7-11・12
- 後藤嘉一、1942、義勇隊開拓団の性格、開拓、6-11
- 平陽訓練所堀口中隊、1942、我が村の建設、開拓、6-8
- 本間喜三治、1942、転換期の義勇軍運動、開拓、6-6
- 藤生好夫、1941a、東満義勇隊開拓団めぐり 若い拓士達、開拓、5-11
- 藤生好夫、1941b、東満義勇隊開拓団めぐり 寧安訪問記、開拓、5-12
- 藤生好夫、1942a、第一次の人々と語る 新京に於ける建設座談会、岡本正編、若き建設－義勇隊開拓団視察記集、満洲開拓青年義勇隊訓練本部
- 藤生好夫、1942b、村づくり座談会、岡本正編、若き建設－義勇隊開拓団視察記集、満洲開拓青年義勇隊訓練本部
- 藤澤忠雄、1940、康德七年度 満洲開拓年鑑、満洲国通信社出版部
- 堀尾貴文、1942、南風と訓練生－ある中隊長の話－、開拓、6-9
- 井上勝夫編、1993a、昭和十四年度 学生衛生隊報告書、白取道博編・解題、満蒙開拓青少年義勇軍関係資料、第 6 巻－第 IV 編、諸調査文書 (2)、不二出版
- 井上勝夫編、1993b、昭和十五年度 学生衛生隊報告書、白取道博編・解題、満蒙開拓青少年義勇軍関係資料、第 7 巻－第 IV 編、諸調査文書 (3)、不二出版
- 今井良一、2001、「満洲」農業移民の経営と生活－第一次移民団「弥栄村」を事例として－、土地制度史学、173 号

- 今井良一、2003、「満州」試験移民の地主化とその論理－第3次試験移民団「瑞穂村」を事例として－、村落社会研究、9-2
- 今井良一、2008、満洲農業移民における地主化とその論理－第三次試験移民団「瑞穂村」と第八次「大八浪」分村開拓団との比較から－、蘭信三編著、日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学、不二出版
- 石川県学務部職業課編、1940、満蒙開拓青少年義勇軍 現地報告座談会、石川県学務部職業課
- 石山脩平、2000、満州開拓青年義勇隊の教育、佐藤広美編、復刻版 興亜教育1、緑蔭書房
- 五十子巻三、1943、戦ふ現下の開拓政策、開拓、7-6
- 上笠一郎、1973、満蒙開拓青少年義勇軍、中央公論社
- 菅野正男、1939、土と戦ふ、満洲移住協会
- 桂広介編、1977、青年期－意識と行動－＜青年心理論集＞、金子書房
- 川北哲編、1981、大石頭 満洲開拓青年義勇隊訓練所の記録、「大石頭」刊行委員会
- 木村勇、1939、嫩江便り、偕拓、3-1
- 教学局編、1993、興亜学生勤労報国際 満洲建設勤労奉仕隊 医療特技隊衛生実態調査（昭和十六年度）、白取道博編・解題、満蒙開拓青少年義勇軍関係資料 第5巻、不二出版
- 小林英夫・張志強編、2006、検閲された手紙が語る満洲国の実態、小学館
- 小林国雄編、1988、羽賀中隊竜湖青春五十年史：第二次竜湖義勇隊開拓団の記録、第二次竜湖義勇隊開拓団同志会
- L・Young、2001、総動員帝国、加藤陽子・川島真・高光佳絵・千葉功・古市大輔＝訳、岩波書店
- 満蒙開拓を語りつぐ会編、2006、下伊那のなかの満洲 聞き書き報告集3、飯田市歴史研究所
- 満洲移住協会、1941a、開拓地の文化性“村づくり”の理念を語る座談会、開拓、5-10
- 満洲移住協会、1941b、開拓相談 義勇軍と青年学校、開拓、5-9
- 満洲移住協会、1941c、戦時下の開拓政策を語る座談会、開拓、5-8
- 満洲移住協会、1942a、東亜新情勢と満洲開拓第二期計画＝研究座談会、開拓、6-2
- 満洲移住協会、1942b、座談会 義勇隊開拓団と満洲農業、開拓、6-1
- 満洲移住協会、1943a、東京から満洲へ！市出身義勇隊員の座談会、開拓、7-5
- 満洲移住協会、1943b、座談会 決戦下の満洲開拓、開拓、7-4
- 満洲移住協会宣伝部、1938、満蒙開拓青少年義勇軍とは何か、拓け満蒙、臨時増刊号
- 満洲開拓史復刊委員会、1980、満洲開拓史、全国拓友協議会
- 満洲拓植公社、1938、躍進日本を築く（下）満洲開拓義勇隊を語る、拓け満蒙、9月号
- 三浦悦郎、1942、満蒙開拓青少年義勇軍の現地訓練と将来、満洲移住協会
- 森本繁、1973、ああ 満蒙開拓青少年義勇軍、家の光協会
- 長野県歴史教育者協議会編、2000、満蒙開拓青少年義勇軍と信濃教育会、大月書店
- 長野県歴史教育者協議会事務局編、2007、中国の人々から見た「満蒙開拓」・「青少年義勇軍」－中国黒龍江省社会科学院、「日本の中国東北移民についての調査と研究」（翻訳と解説）、長野県歴史教育者協議会事務局
- 中村迪、1942、義勇隊は農民たるべし、開拓、6-10
- 西田勝・孫継武・鄭敏編、2007、中国農民が証す「満洲開拓」の実相、小学館
- 西村甲一、1969、日本農業の共同化に関する研究－協業経営を中心にして－、財団法人日本農業研究所
- 野村佐太男、1978、満洲国開拓地犯罪概要、山田昭次編、近代民衆の記録6－満洲移民、新人物往来社
- 野村馬編、1943、康德九年度版 満洲開拓青年義勇隊統計年報、満洲開拓青年義勇隊訓練本部
- 大上節男、1942、現地報告 義勇隊教学奉仕行、開拓、6-12
- 斉藤俊江、2007、満洲移民の送出と開拓地の生活、満洲移民－飯田下伊那からのメッセージ－、飯田市歴史研究所
- 佐倉浩二、1944、義勇軍、北光書房
- 櫻田史郎、1942、聖嶽の先駆－伊拉哈義勇隊開拓団を訪れて－、岡本正編、若き建設、満洲開拓青年義勇隊訓練本部
- 櫻本富雄、1987、満蒙開拓青少年義勇軍、青木書店
- 信濃教育会、1938、満洲国農業移民地視察管見、第4輯、信濃毎日新聞株式会社
- 信濃教育会、1942、支那・満洲国視察管見、第7輯、信濃毎日新聞株式会社
- 白取道博、1984、「満蒙開拓青少年義勇軍」の創設過程、教育学部紀要、45
- 白取道博、2008、満蒙開拓青少年義勇軍史研究、北海道大学出版会
- 鈴木芳郎、1942、この心・この力、岡本正編、若き建設、満洲開拓青年義勇隊訓練本部
- 拓務省、1941、座談会 御親閲参列部隊を囲む 青少年義勇軍現地報告、開拓、5-7
- 拓務省拓務局、1938、満洲青年移民の栞、拓務省拓務局
- 拓務省拓務局、1939、満蒙開拓青少年義勇軍現地通信集、第2輯、拓務省拓務局
- 田村直治、1942、若き義勇軍、東水社
- 田中寛、2004、「満蒙開拓青少年義勇軍」の生成と終焉－戦時下の青雲の志の涯にて－、大東文化大学紀要、42
- 田中耕司・今井良一、2006、植民地経営と農業技術－台湾・南方・満洲－、田中耕司編、岩波講座、「帝国」日本の学知、第7巻、岩波書店
- 上柿正雄、1942、現地報告 さあ生産に進軍だ－昌図訓練所の思ひ出－、開拓、6-5
- 上野正喜、1941、訓練生手記 開拓一年の記 その一、開拓、5-8
- 上野満、1981、協同農業の理想と現実、家の光協会
- 上野満、1985、農に燃える：協同農業六十年の軌跡、家の光協会
- 打木村治、1944、満洲国義勇隊ものがたり 拓けゆく国土、増進堂
- 矢口武、1942、満蒙開拓指導員養成所開所に就て、開拓、6-12
- 依田憲家、1972、第二次大戦下、日本の満洲移民の実態－移民団関係の犯罪を中心に－、社会科学討究、18-1
- 横山武平編、1977、第三次義勇隊大蒙開拓団史、大蒙同志会
- 葉家訓練所辻中隊、1942、我が村の建設、開拓、6-8
- 全国鉄驢会編、1993、満洲開拓青年義勇隊鉄驢訓練所所史、全国鉄驢会
- 図司安正編、1941、青少年義勇軍教本、財団法人雪国協会